



大きな観光バスも立ち寄る薬照寺には、樹齢二千年の大桂があります。
お寺の歴史は約千年。
お寺の歴史よりもずっと長くこの桂の木はこの土地を見てきたのです。

高さ 30 メートル、目通り幹回り 13.5 メートルにも成長した大桂は
1973 年には新潟県天然記念物に認定され貫禄のある姿を誇っています。

日本で一番古いハーブとも言われているのが、桂の葉。
乾燥させた桂の葉は防虫剤として
布に包んでタンスに入れたり、お香にしたり…。
10 月中旬からは甘い香りを漂わせ、
香水や芳香剤、アロマなどの無い時代から
近隣の村人たちに天然のアロマセラピーを施してくれていたのです。
さぞかし癒されたことでしょう…。

薬照寺では本堂の廊下にこの桂の木を用材として使用されたこともあります。
昔から大活躍した木なのです。

四季によって様々な色で魅せてくれる大桂。
たわわに黄葉した葉を身いっぱい広げた姿は圧巻。
秋が深まり薬照寺の桂の葉が落葉し木の葉がすべて舞い散ると、
この地域に初雪が降ると言い伝えられてきました。
この土地の日和定めとして、日々見つめられてきた大切な巨木です。

ひらりひらりと舞い散る様を見ては、
漬物を漬け、干し柿を吊るし、薪を割り、雪囲いをし…

長く厳しい冬に向け、冬支度を日一日と急ぎます。

この大桂の木…

昭和 60 年ごろから葉が実らず黄緑色になり、具合が悪くなってきました。

大変心配をした当時のご住職は、

すぐさま樹木医の山野忠彦氏に治療の依頼をしました。

山野先生は日本で初めて木のお医者さん『樹木医』となった方です。

当時、山野先生は一年先まで予約がいっぱいでした。

一年待ち、ようやく平成 2 年の 11 月 1 日に

大阪から八人のお弟子さんを連れて、桂の木の治療に来ました。

調査の結果、木の中に雨水が溜まり中が腐って

スカスカの空洞になったところが沢山ありました。

そこを全部切り、セメントで埋め

栄養剤を土に埋めて二週間の治療が終わりましたが、

これから迎える厳しい雪国の冬…

痛々しい桂の木が豪雪に耐えて持ちなおしてくれるのか、

ご住職は大変心配をされたそうです。

雪が消え、待ち遠しかったうららかな春…

なんということでしょう！

桂の木に、今まで咲かなかった花が咲いたのです。

桂の木は幹が力を合わせ、支え合いながら生きています。

まるで家族のように。

平成 18 年の大雪にも 1 本の枝も折ることなく

強く、しなやかに。

全国 1,000 本の木を元気にしたという樹木医の先生が

「日本中回ってもこんなに大きな桂の木は見たことが無い」と認めた木。

その生命力が今もなお、私たちに力を与えてくれます。

また、長い歴史を持つ薬師寺は歴史の宝庫。

第二次世界大戦後にビルマ(現ミャンマー)から亡命した

バー・モウ首相をかくまったことでも知られています。

バー・モウ氏は、追っ手が来たらいつでも自害できるように

衣服に毒薬を縫い付けて持ち歩き、

更には拳銃も懐に身に付けていたと言い伝えられています。

時には裏山へも出かけたりしながら

昭和 20 年から 21 年の 5 か月間身を隠していたのだそうです。

イギリスから独立する為に半生をささげた
バー・モウ首相が亡命した薬照寺を見る為に
多くの留学生達がこの薬照寺を訪れているといいます。

他にも境内には、幕末から明治初期にかけて
一大学徳僧として全国に名を馳せた「大崎行智之碑」があったり、
隣接して建てられた宝物殿には、歴史ある美術品や
海を越えて伝えられた文化が色濃く残され展示されています。

宝物殿の中には戦国時代の武将、
豊臣秀吉、伊達政宗、上杉景勝や
江戸時代の松尾芭蕉、鈴木牧之らの書が展示されるなど、
時が止まったような不思議な空気に包まれます。

今は亡き歴史上の人物たちが生き抜いた時代を
大桂は黙って見つめてきたに違いありません。

大桂と共に平安後期から約千年続く薬照寺。
ぜひ足をお運びください。

新潟県南魚沼市君沢 851